

(資料)

プラトーン『クリトーン』

水*
崎
博
明

—

ソークラテース

43

何でこんな時間に君は来たんだ、クリトーン。まだ朝早いんじゃないのか。

クリトーン

それはそうだよ。

ソークラテース

何時頃だね、ちゃんと言えは。

クリトーン

鶏鳴って頃さ。

ソークラテース

不思議だね、どうしてその気になって君に対して牢番が聞き入れることにしたのか。

クリトーン

もう彼は御馴染みなのだ、ソークラテース、僕がしばしばここへ通って来るものだから。それに何かと心づけしてもらっているのだ、この僕にね。

ソークラテース

けれど、今来たの、それともずっと前に

クリトーン

かなり前にだ。

ソークラテース

B
ならどうしてすぐに僕を君は起さなかったんだ、そうせずに黙って傍に座っているというのだ。

クリトーン

ゼウスに誓って、ソークラテース、起すものか。それに、この僕自身、ありたくはなかったのさ、それ程の不眠と苦痛の中にはね。いや、君のことではまたさっきから僕は驚いているのだ、何と気持ちよく君が眠っているかを見ていながら。それでまた、わざと君を僕は起さなかったのだ、出来るだけ気持ちよく君が過してくれるように、と。そして実にしばしば、一方、

君を以前にも全人生において僕は仕合せな奴だなあと思ったことだった、その生き方のことではだが、然るに、大いに取り分けて目下遣って来ている禍いの中においてそう思う。何と安々としてそれを、また穩やかに君が耐えていることか、とね。

ソークラテース

だってまた、クリトーン、調子外れてことだろうからね、この歳の者でありながらももう死なねばならぬとなるとそれを愚図々々言うってことは。

クリトーン

C 彼の連中だってまた、ソークラテース、その歳にしてそうした色々の禍いの中に捕らえられるのだが、いやしかし、何一つ彼らを解放などはしないのだ、年齢はね、遣って来ている運命に対して愚図々々言わないようにとはだ。

ソークラテース

それはそうだね。いやしかし、一体、何でこんなに早くに君は来たのかね。

クリトーン

知らせを、ソークラテース、持っただよ、辛い知らせを。君にはなく、とこの僕には見えるのだが、いや、この僕にとって、また君の知己の者たちすべてにとって辛く重い知らせをだよ。そしてそれを、この僕は、この僕に僕が思われるところ、最も重いものの中で耐えることになるだろう。

ソークラテース

D どんな知らせなのだね。それとも船が着いたのだとでも言うのかね。それが到着すれば僕は死ななければならぬのだけれど

も。

二

クリトーン

いやそれはね、まだ着いてはおらんのだよ、いやしかし、先ず僕に思われるには、今日それは帰って来ることだろう、報告することどもからしてね、スーニオンから遣って来てそこで船を置いて来た人々たちがだよ。されば、明らかなのだ、それからして、今日船が帰って来るであろうということは。そして、必然は、実に、明日へとあることだろう、人生を君が終えるべきそれはね。

ソークラテース

いやしかし、クリトーン、善き仕合わせでもって、もしその仕合わせでもって神々にとっては事が好ましいのなら、それでもってあらしめよ、だ。とは言え、僕は思う、それは明日帰って来ることだろうと。

クリトーン

44 どこから君はそのことを推測しているのだ。

ソークラテース

この僕が君に言おう。何故なら、何故かしら翌日にいうことで僕は死なねばならなかったのだから、船が帰って来るその日のね。

クリトーン

とにかく言っているわけだ、それらのことに筋の連中は。

ソークラテース

それならだよ、今日この日に、思うに、それは帰っては来ないだろう、いや、次の日であろう。然るに、僕は推測するのだ、或る夢の今夜のちょっと先に僕が見たものからね。そして君は、恐らく何か折りよくも、僕を目覚めさせなかったということだろう。

クリトーン

だが、だよ、どんな夢だったのかい。

ソークラテース

B
思われたのだよ、或る女性が近づいて来ながらに、美しく姿よき女性だったが白いヒマティオン（上着）を纏っていて、私を呼びこう言った、とね。

ソークラテース、三日目に肥沃の地プティエーにそなたは着くことだろう。

クリトーン

奇妙な夢だね、ソークラテース。

ソークラテース

明々白々なだよ、とまれ僕に思われるところではね、クリトーン。

プラトーン『クリトーン』（水崎）

三

クリトーン

とにかく、余りにもね、見えるところ。いやしかし、ダイヤモンドがかったソークラテース、なおこの今にもこの僕に従い、君は救われ給えよ。この僕にとっては、もし君という君が死ぬことにもなれば、それは一つの禍いなんかではない。否、一方、こうした友、この僕が誰一人として見出すことがなかったといったそのような友を奪われることを別にしても、なお、他方、多くの人々には僕が思われるだろうと考えてだ。つまり、彼らはこの僕や君をはっきりとは知らないものであるが、君を僕は救うことが出来たのだ、もし僕が金銭を費やす気になりさえすれば、それなのに等閑にしたのだというように。それにしても一体どんなそれより不面目な評判があることだろう、金銭の方を友たちよりも大切にしたと思われることよりもだよ。何故なら、信じるまいからね、多くの人々は、他ならぬ君自身がここから立ち去る気になってくれなかったのだというように、だよ、我々は熱心に勧めたというのに。

ソークラテース

いやしかし、何故我々には、幸せなクリトーン、そんな風に多くの人たちの思惑のことが引掛かって来るのかね。何故なら、最も訳の分った人たち、その人たちのことを顧慮するのが至当である人たちは、きっと考えてくれることだろうからね、それらのことはその通り、ちょうど行為されたように行為されたことだ。

クリトーン

D いやしかし、君は実に見るのさ、必然なのだ、ソークラテース、多くの人々の思惑もまた顧慮すべきなのだ、と。然るに、

まさにこの今にこの場にあることども自身が明らかなのだ、多数者らは諸々の悪の最小ならざるものどもをではなく、殆ど最大のものどもを作り出すのだと、ねえ。もしも人が彼らの中で中傷を受けることになってしまつてあるのであれば。

ソークラテース

何故なら、もしべきだつたとすればだ、クリトーン、多くの人々が最大の悪を成し遂げるべくもね。そしてそれは彼らが最大の善をもまたなし遂げるためにだとすれば、それはまた結構なことだつただろうさ。だが実際には、そのどちらも彼らは出来はしないのだよ。何故なら、思慮ある者にも無思慮な者にも彼らはすることなどは出来ないのであり、遭るのはこれ彼らの行き当たりばつたりのことなのだ。

四

クリトーン

E それらのことは、先ずはそうとしておくかな。だがしかし、こうしたことを僕に言ってくれ給え。はたしてだよ、この僕のことそしてその他の知人のことで君は用心しているのではないか。もし君が此処から逃亡すれば告発が生業の連中が我々に面倒をかけて来るんじゃないか、君を我々が此処から盗み出したのだと。そして我々が強いられて、或いは全財産までも或いは大層な金銭を投げ出さざるを得なくなるとか、或いは何かその他の目に、それらに加えて遭いはしないか、などだ。何故なら、もし何かそうしたことを君が恐れているのだつたら、そいつは打っちゃってくれ給へ。何故なら、この我々は、まあ何れ正しいのだから、君を救い出した上でその危険を危険として冒すこと、そしてもし必要ならなおそれに勝る危険を冒すこと

がだ。いや、この僕に君は承服し他のようにはしてくれないな。

ソークラテース

それらのこともまた用心してはいるが、クリトーン、また他の多くのことをもそうなのだ。

クリトーン

それならだよ、それらのことは心配し給うな——何故なら、随分の銀子でもないのだから、それを受け取って連中が君を救い出してここから連れ出す気になってくれる銀子はだ。それからさ、君は見えないかな、それら生業が告発業だつて連中はどんなに安くて済むかってことを。また何ら必要でもないってことなのだ、彼らに対しては多くの銀子などは。他方、君には先ず

そもそも最初からあるんだよ、この僕の金銭が、この僕の思うところ、十分にだよ。それからだ、またもし君が何かこの僕のことので気かけながら、君が、使っちゃいかん、僕の金銭はなどと思うのなら、客人のそれらの方々が此処へ来ていて、もう準備はあるのだ、金を使う準備がね。然るに、一人がまたまさしくそのことへとまた十分な銀子を準備完了でもあってね、つまりテーブルのシムミアースだけでも、他方、用意があるのだよ、ケベースもその他実に多くの人々が。そこでまた、まさにそれを僕は語っているのだが、それらのことを心配して君自身を救うことを躊躇っちゃあいかん。またこれは君が法廷で語っていたことだが、悩ましいことともなりはすまいよ、君がここを出て行ったら君が君自身をどう扱ったものであるか扱いも出来ないだろうなどということがさ。何故なら、先ずは至るところ、そしてその他の何処へであれ君が着くそこで、人々は君をきつと歓迎することだろう。他方、もし君がテッタリアーへ行くことを望むなら。この僕にはそこに客分の者たちがいてきつと彼らは君を下へも置かず遣つてくれて、安全を君に与えてくれることだろう。だからまた、君を誰一人も苦しめることは

ないのだよ、テッターリアーの地にいる人々の中のね。

五

なお、他方、ソークラテース、正しいこととして君が遣ろうとしているとは、僕には思われないのだよ、問題を。つまり、君自身を放棄することさ、救われることが出来るのによ。そしてこうしたことが君自身をめぐって生ずるよう君は一所懸命なのだ、まさにそれらのことどもで君の敵どももまた一所懸命になろうかということ、そしてまた、事実、君を破滅させることを望みながら彼らが一所懸命になったそうしたことがだよ。それらに加えて、他方、また息子さんたちの君自身のであるものごとにかくこの僕には君は思われるのだ、放棄しているのだ、と。この方々を 君には出来るというのによ、扶養することも教育し上げることさね、それなのに、君は置き去りにした上で行ってしまおうとしているのだ。そして君の見は、まあ何に彼らがあち当たらうとそれを彼らが遣るだろうということだ。然るに、彼らはあち当たらうとしているわけだ、当然のことながら、孤児の身分というものにおいてはその孤児たちをめぐって生じて来るのが習いなのだといったことどもに、ね。何故なら、或いは子供を作ってはならないか困難をとものにせねばならぬかなのだからね、養育し教育しながらにだ。然るに、他でもない、君は思われるのだよ、最もたやすいことを選んでいるように。だが、べきなのだ、まさしくそれらをこそ善きまた勇氣ある男子が選ぼうかというそれらを選ぶべきなのだ。とにかく口にして徳のことを一生を通じて心がけるのだなどと言うからには。とにかくこの僕としては君のためにも我々君の知人たる者らのためにも恥じているようにね、一切のこと、君をめぐったそれは、何がしか我々の男らしさの欠如によってなされてしまっていると思われるのではないか、と。そして裁

46 きが法廷へ入り込んだことも入り込まずにだつてあり得たのにどのように入り込んだことだったか、と。かつまた裁きの争いそのものにしてからがどんな風に生じ、そして実に顛末のそいつだが、まるでその行為の嘲笑とでもいった如く、何かの悪と

我々の側のその男らしさの欠如により、我々を事はすっかり逃げて行つてしまつたのじゃあないか、とだ。その我々つてのは君を救うことをしなかつたが他ならぬ君も君自身を救うことをしなかつた、そういう風にあつたし可能であつたのだ、もし何かまた僅か我々のものとして増しなものがあつたらだよ。さればそれらのことを、ソークラテース、君は見給え、悪と同時に恥辱的なものだとして君にとつて、そしてまた我々にとつてはあるのではないのかを。いや、考えて見給え——むしろ考えるべき時などではない、もう考えてしまつてあるべき時なのだ——然るに一つだ、考えは。何故なら、この今夜に、それら一切はやつてしまわれねばならぬからだ。然るに、もしなお我々が愚図々々しているようだと思は不可能で最早なされようもないのだよ。いや、何としてでも、ソークラテース、僕に従い、決して他のようにはしてくれないな。

六

ソークラテース

B 親しいクリトーン、君の熱意は大いに素晴らしい、もしそれが何かまつとうなところを持つてあるのなら。然るに、もしそうでなければ、それがより大きければ大きいだけ、それだけ一層難儀なものなのだ。されば、よく見てみなくてはならぬのだよ、我々は、それらを遣るべきか否かと。この僕は、今が最初というのではなく、否、また常にこの私のものであるものの中

で言論以外の如何なるものにも服しないといったような者なのだということですね、何であれ、僕が検討して見て最上だと見え

- C この廻り合はせが生じているからと言ってね。否、殆ど何か、それらは同じそれらの言論よりもより優れたものをもし我々が。更に、この今に現在しているそれらより一層多大なものとして大衆の力が、ちょうど子供たちをそうするように、我々をびくびくさせるとしてもだ。拘禁や死刑や財産没収を送りつけながらにね。されば、どうすれば我々は最も程に適ってこれらを見つめることにもなるだろうか。もし第一には先ず、この議論を我々が再度取り上げることにもするとすれば、君がそれを諸々の思惑について論じている議論だが、どうだそれは立派にそれぞれの時に語られておったのか、それともそうではなかったのか。すなわち、一方、諸々の思惑の或るものどもには注意を向けねばならないが、他方、或るものどもにはそうするには及ばぬのだという議論だ。それとも、或いは、一方、この僕が死なねばならぬ以前には立派に語られてそれはあつたけれども、他方、今となってみれば、すっかり明らかとなつたのであろうか、別様に議論のためにということ、それは語られておったのであり、他方、それは冗談だったのだし真実にも無意味だったのだということが。とにかくこの僕をよく考えてみたいのだよ、クリトーン、共同して君と一緒にね。何かしら、僕には議論は一層よそよそしいものに現れて来ようというのだろうか、僕がこんな風な有様にあるからには。それとも同じものであるのか。そして我々はもうさようならをすべきなのか、それともそれに服すべきであるのか。然るに、どのようにではあれ、語られていたのだ、この僕の思うに、その時々、このようにも、何か一廉のことを語ることを思っている人々たちによってね。それはちょうどまさしく今し方にこの僕が語っておつたようにということだが、すなわち、諸々の思惑の人間たちがなすものうち、その或るものはこれを大事にしなけれ
- D
- E

ばならないが、他のものはそうするには及ばないのだ、と。

47

このことは、神々の御前で、クリトーン、思われまいだろうか、立派に語られているぞと君にとっては——何故なら、他ならぬ君は、とにかく人間的なことどもの関する限りは明日にも死に行こうとしているなんてことの埒外にあり、そして君を悩ますようなことなどはあるまいからね、差し迫っている禍いがだ。それで君よく見て貰いたい——十分に語られていると君には思われぬだろうが、人々のすべての思惑を尊重すべきではない、否、或る思惑は然り、或る思惑は否であり、また更にすべての人々の思惑をではなく、否、或る人々のは然り、或る人々のは否なのだ、とこういうことは。何と君は主張する。それらは立派に語られておらぬだろうか。

クリトーン

立派に語られているさ。

ソークラテース

されば、有用な思惑は尊重すべきであり、劣悪なのは否である。

クリトーン

そうだよ。

ソークラテース

然るに、有用なのは思慮のある人々の思惑であり、劣悪なのは思慮のない人々の思惑なのだ。

クリトーン

それは無論だね。

七

ソークラテース

B さあ、そこだが、また更にどんな風にこうしたことどもは語られておっただろうか。体育に勤しんでいる者でまたそのことを仕事としている者は、どうだ、すべての人の賞讃や非難や思惑やに注意を向けるだろうか。それともただ一人の彼の人のそれらに向けるだろうか、すなわち、ちょうどまさに医者だとか体育家だとか言った。

クリトーン

そりゃあ、ただ一人の人のだよ。

ソークラテース

それなら諸々の非難を恐れ諸々の賞讃を喜ぶべきなのではないかな、ただ一人のその人のそれらをこそね。いや、多くの人のそれらなどではないのだ。

クリトーン

それはもう明らかなこと

ソークラテース

して見ると、次の仕方でこそ、彼のとっても事は行われるべきであり、体育すべきであり食すべきであり飲むべきなのだ、

プラトーン『クリトーン』(水崎)

一一八九

その一人の者に、つまり監督者にしてももの分かった人であるが、よしと思われるようなその仕方だね。すべて一切のその他の人々にそう思われる仕方でもよりも一層だ。

クリトーン

その通りだよ。

ソークラテース

C

よかろう。然るに、一人ある人に従うことをせず彼の思惑やその諸々の賞讃を尊重せずにおいて、他方、大勢のまた何一つも分ってはいない人々のそれらを尊重したとすれば、はたして彼は何一つの悪をも蒙ることはないであろうか。

クリトーン

どうして蒙らないなんてことがあるのだ、決まっているではないか。

ソークラテース

だが何だね、悪のそれというのは。そしてそれは何処へと張って行ってるのだ。そして服従しない者の持っているものの一
体何へと関っているのであるか。

クリトーン

明らかだ、身体へ関っているとは。何故なら、それをこそ彼は破壊するのであれば。

ソークラテース

結構だ。それなら他のことどももまた、クリトーン、その通りにあるのではないかな。これはすべてを一々我々が通って行

D もや悪しきことどもについても、そしてそれらは、それらについてこそ目下検討が我々にとってはあるというものなのだが、かないようにということなのだが、また実に正しいことどもや不正なことども、醜いことどもや美しいことども、善きことどもや悪しきことどもについても、そしてそれらは、それらについてこそ目下検討が我々にとってはあるというものなのだが、大勢の人々の思惑に我々は従ってそれを恐れねばならぬのであるか、それとも一人の人のそれをこそなのであるか。もし誰かが分つてあるとすればだね。そして我々はその彼をこそかつは恥じかつは恐れねばならないのではないか。すべて一切の他の人々に対してそうするよりも。彼にもし我々が着いて行くことをしないようだったら、我々は彼のものを腐敗をさせ、台無しにきつとすることだろう。すなはち、正しきものでもってより優れたものとなり、不正なものでもって滅び去るものをこそだ。それとも何一つもがそれではないのか。

クリトーン

あると思うさ、とにかく僕なら、ソークラテース。

八

ソークラテース

E さあ、そこだよ、そこが肝要。もし健康的なものによっては、一方、より優れたものとなるが、他方、病的なものによってはすっかり損なわれて行くものを我々が破壊するとすればだよ、ものよく分つた人々の思惑には従わないでただけど、はたしてそれは生きられるものとして我々にとってあるのだろうか、そのものがすっかり損なわれていてだよ。然るに、そのものは、何処かしら、実にあるわけだ、身体としてね。それともそうではないか。

プラトーン『クリトーン』(水崎)

一一九一

クリトーン

そうだとも。

ソークラテース

されば、はたして人生は生きられようか、我々にとって、悲惨ですっかり損なわれてしまっている身体とともだよ。

クリトーン

いや、決してそんなことは。

ソークラテース

48
いやしかし、彼のものとともにだと、して見ると、我々にとって人生は生きられるとも言うのであるか、それがもうすっかり損なわれてしまっているというのにだ。そのものには、不正なものは、一方、台無しともするのだが、他方、正しいものは裨益するものであるが。それとも、我々はより取るに足らぬものだと我々は考えているのかね、身体よりはそのものが。それが一体何として我々のものどもに属するのであれ、それをめぐってこそ不正と正義とはあるものなのだ。

クリトーン

何で取るに足らぬものだと考えるものか。断じて考えはしない。

ソークラテース

否、それは一層尊重すべきものだね。

クリトーン

大いにそうだとも。

ソークラテース

して見ると、最も優れた君よ、全くこのようにして、我々にとっては氣遣うべきではないのだ、何を多くの人々が我々に對して言うことだろうかなどは。否、諸々の正しい事どもと不正なことどもについて理解ある人、すなわち、一人の人と眞実そのものが何を言うかということこそなのだ。だからまた、第一に、一方、この仕方でもって君はまっすぐな仕方では話を導き入れてはおらぬわけだよ、多くの人々の思惑を我々は諸々の正しいことどもも美しいことどももよきことども、そして反対のものどもについては氣遣わねばならぬことを導き入れて行ってき。「いやしかしだ」と、とにかく言うことであろうか、人は「出来るのだ、我々を多数者は殺すことが」

B

クリトーン

実に明らかなことだ、それらのことも。何故なら、きつと言うことだろうか。眞実を君は語っているよ。

ソークラテース

いやしかし、驚くべき君よ、この議論、それを我々が詳らかに今したところであるそれは、とにかくこの僕にとり思われるのだよ、依然として同様にあるのだ、と。先にもあったのとね。然るに、更にまたこの議論を君はよく見てくれ給え。なおそれは我々にとつてじつと留まっているか否かを。すなわち、生きることを最大のことにすべきではなく、否、よく生きることこそということだ。

クリトーン

プラトーン『クリトーン』(水崎)

一一九三

いや、じっと不動だよ。

ソークラテース

他方「よく」とは「美しく」と「正しく」ということと同じことだということは不動かね、それとも不動ならずか。

クリトーン

不動だよ

九

ソークラテース

C

されば、同意されたことどもからしてそのことをよく見てみなくてはならぬのだよ、正しいことなのか、この僕がここから出て行くことを試みることは、アテーナイの人々が許してはいないような時にだ。それとも否であるのか。そしてもし、一方、

D

それが正しいと見えようなら、我々は試みて見ようではないか。他方、然らざれば放っておこう。然るに、それらを君こそが語っている諸々の考慮、金銭の費やしや思惑や子供らの養育についてのそれは、さながら真実にもそれらのことどもは、クリトーン、考慮することどもではないのかな。いとも安々と殺してみたり再び生き返らせてみたりとにかくする、それはもしも彼らが出来たとすればだが、それも何も知性とともにはなくてのことであるが、それらの多数者のね。然るに、この我々にとっては、言論がこのように選んでいるのであれば、何一つ他のことを見るべきではないのではないか。まさしくそれを今し方に我々が語っておったことの他は。すなわち、正しいことどもを我々は遣っていることになろうというのか、金銭をそ

れらこの僕をここから連れ出してくれよう人たちに支払い感謝も捧げて行きながら。そして自ら連れ出したり連れ出されたりしながらに。それとも眞実をもって我々は不正を犯すことであろうか、すべてそれらを為して行きながらでは。そしてもし我々ははっきりと不正なことどもとしてそれらを遣っているのだと見えたならば、考慮に入れてはならないのではないか、死ななければならぬのかどうか、留まって静かにしながら、とかいうことも、他の何であれ受けねばならぬのかどうか、とかいうことも、不正を犯すことよりも前に。

クリトーン

先ずは立派に僕には思われるよ、君は語っていると、ソークラテース、だが見るんだな、何を我々は遣って行ったものか。

ソークラテース

E

我々は見てもみようではないか、善き人よ、共同して。そして、もし何がしかの仕方で君が、この僕が論じている間にも反論出来るのであれば、君は反論し給え。そして君に僕は服することだろう。他方、もしそうでないとすれば、もう止めてくれ給え、至福な君、何度も何度も僕に同じ議論を語るのは。ここからアテナイの人たちが不本意でもこの僕は立ち去るべきなのだとかいう風に。この僕は多大のこととして思っているのだと考えてくれてだ。君を説得した上でこそそれらのことを遣うことをね。いや、不本意なのに遣ったりするものか。だが、見てくれ給え、考察の出発点を。君に十分な仕方ではそれは語られているとすれば。そして君は努めてくれ給え、問われて行くことを答えることに、どの道筋でであれ取り分けて君が思う仕方でもって。

クリトーン

いや、きっと僕はそう努めるだろうよ。

プラトーン『クリトーン』（水崎）

十

ソークラテース

どんな向きでもってしても、と我々は主張するだろうか、意図して不正を犯すべきではない、と。それとも、一方、或る向きでは不正を犯すべきであり、他方、或る向きでは然らずだ、と。それとも断じてとにかく不正を犯すことは善きことでも美しいことでもないのか、しばしば我々にとって先立つ時間の中でも同意されたように。まさにそのことは先程にもまた語られていたのだった。それともすべての我々にとっての彼の先立つ同意はこれらの僅かな日々において流れて出て行ってしまっており、そしてその昔には、クリトーン、して見ると、この年齢での老人の男としてお互いに真面目に語り合いながらも、我々是我々自身の注意を逃れたのだったのか、実際は子供らと何一つ変わるところなくありながらだよ。それとも或いは、何にも増して事はその時に我々にとって語られていたその通りにあるというのか。すなわち、多数者が肯定しようとするまいと、そして、よしまた我々がこれよりもなお一層辛いことどもを身に受けようとしそれがまたより穏やかなことをであろうと、それにも拘らずに、とにかく不正を犯すことは不正を犯す者にとって悪でもあり醜いことでもあるというのか、あらゆる向きでもって。我々は肯定するか、それともしないのか。

クリトーン

肯定するね。

ソークラテース

して見ると、断じて不正を犯してはならないのだ。

クリトーン

無論、それはならない。

ソクラテース

不正をなされた者もまた、して見ると、不正の仕返しをしてはならないのだ、多数者が思うようにね。ともかくも断じて不正を犯してはならぬのであれば。

クリトーン

C
明らかに否だ。

ソクラテース

然るに、一体、どうだね。悪事を働くべきか否か。

クリトーン

働いてはならないさ、無論、ソクラテース。

ソクラテース

然るに、どうだ。仕返しに悪事を働くこと、悪しくその身に蒙った者が、ということは、多数者が主張するように、正しいことなのか、それとも正しくはないのか。

クリトーン

断じて正しいことではない。

プラトーン『クリトーン』（水崎）

一一九七

ソークラテース

一一九八

何故なら、何処かしら悪しき仕方で人々に働きかけることは不正を犯すことと何一つ異ならないのだから。

クリトーン

その通りさ。

ソークラテース

D

して見ると、仕返しに不正をなすことも人々の誰一人に対しても悪しき働きかけることとしてはならないのであり、更にはそのことはよしまた何を彼らによって人がその身に蒙ることがあってもである。そして君は見てくれ給えね、クリトーン、それらのことを認め許容して行きながらも思惑に反して君が同意することのないように、とだ。何故なら、僕は知っているのだから、或る僅かな人々にとってそれらのことどもはそれによしと思われるのであり、また思われることだろう、と。されば、その人たちにはその通りに思われた人々とそうは思われなかつた人々とは、あり得ないのだよ、共同の諮りごとは。否、必然なのだよ、この人たちが互いのことを軽んずることは。互いの諮りごとを見て行きながらも。されば見てくれ給え、君にしてもよくよく大いに。はたして君は共同し君にも思われて我々はそこからして諮りごとをしながら出発して行くのだというのか。すなわち、断じてまっすぐなあり方でありはしないであれば、不正を犯すことも不正な仕方では身に蒙った者が自己防衛を悪しく遣り返すことで遣えることもと、こういうようにして。それとも君は立場を異にして出発点は共同はしないのであるかを。何故なら、この僕には、一方、先程にもまたその通りに、そして今もお、そう思われるのであるから。だが、君にとってもし何かしら他の筋道でもって思われてしまうのであれば、君はそう語り教えてくれ給え。然るに、先

のことどもにもし君が踏み留まるといふのであれば、その後のことを聞いてくれ給え。

クリトーン

いや、僕は踏み留まっているし、かつまた僕にもとにもそう思われているよ。いや、語ってくれ給え。

ソークラテース

僕は語るよ、では新たにその次のことを。だがむしろ質問する。それらが何でもあれ、人が誰かにそれらは正しくあると同意したものは為すべきか、それとも欺くべきであるか。

クリトーン

それはなすべきさ。

十一

ソークラテース

それらのことどもからしてだ、君は注意してくれ給え。此処から立ち去って行つては、我々はそれがポリスを説得しない上であらば、それは悪しき仕方である人たちに我々が働いていることにはならぬだろうか。そしてそれらを最も少なくそうせねばならぬその彼らに対してね。それともそうではなか。そして我々は踏み留まっているだろうか、我々がそれは正しくあると同意したことどもに。それとも否であるか。

クリトーン

プラトーン『クリトーン』（水崎）

一一九九

僕は出来ないね、ソークラテース、答えることが、君が尋ねていることには。何故なら、僕は考えつかぬのだから。

ソークラテース

いやしかし、このように君は見てくれ給え。もしまさに我々がよしまた脱走しようとしているのであれ、よしまたどのようにその行為を名づけねばならないにもせよ、そうしているところに、諸々の法が遣って来たその上で、またポリスという共同体が傍に立ってこう尋ねたとするならば、曰く「私に言ってくれ、ソークラテース、何を君はするつもりでいるのかね。君の遣りかけているその所業でもって君は心に思っている、諸々の法たる我々を破壊しそしてまたポリス全体をそうする、君の勝手で、という以外の何かだろうか。それとも君には思われるのかね、彼のポリスは存在する、そして転覆されてしまうようなことはないのだ、と。そこにおいて一旦生じた諸々の判決が何一つ力を持たず一人たちによって權威なきものとなり損なわれるといったポリスが」と。

何を我々は言うべきであろうか、クリトーン、それらに向かって、そしてその他のそうしたことどもに向かって。何故なら、沢山のことを人は、他でもそうだがまた弁論家は、出来ようからだよ、言うことがね。その法の滅ぼされようとしているもののためにだよ。それは、一旦判決された諸々の判決が權威あるものたることを課しているのだというそれなのに。それとも我々は、彼らに向かって言うことであろうか。曰く「何故なら、不正を犯したからだ、我々に対してポリスが、そしてまっすぐならざる仕方で判決を下したのだから」と。これらをだろうか、或いは何を我々は言うことだろうか。

クリトーン

それらをこそだ、ゼウスに誓って、ソークラテース。

ソークラテース

されば、どうだ、もし諸々の法が言つたとすれば。曰く「ソークラテース、それらのことまでも同意されておつたのだろうか、我々と君にとつては。それとも踏み留まることこそがではなかったか、諸々の判決の、何であれ国家が判決を下したものは」と。されば、もし我々が彼らのそう語っているのに驚くとすれば、多分、それらは言うことだろうか。曰く「ソークラテース、驚くなかれ、語られたことどもを。いや、答え給え。君はまた習いともしておるからにはだ、問うことと答えることとを取り扱うことには。何故なら、此処が肝要なのだからだ。一体、何を非難として我々とポリスとに対して持ち出しながら、お前は我々を破壊しようとするのであるか。第一には、一方、君をこの我々こそが設けたのではなかったか。そして我々を通してお前の母を父は娶りまたお前を生んだのでは。されば、君は言い給え、我々のであるこれらの法、婚姻をめぐつてのそれらに対して、君は何か文句があるのかを、それらが立派なあり方をしてはいないのだとでも」と。文句はありませんと、僕は言うことだろうか。「いやしかし、生まれた者の養育と教育、その中で他ならぬ君も育てられた教育をめぐつてそれらに対してなのかね。それとも立派に課してはいないだろうか、我々のであるそのことにと配置されている諸々の法は。君の父のだという者に言いつけて君を音楽と体育とにおいて教育することをさせていたのだが」と、こう言うなら、立派に課していると僕は言うことだろう。「よろしい。然るに、お前は生まれ養育され教育されたからには、お前は言うことが出来るだろうか、第一に、一方、お前が我々のものや子孫や僕ではないのだというように。自らがまたお前にとつての先祖たちからしてが。そして

もしそのことがその通りなのだとすれば、はたして平等ということでお前は思うのかな、お前にそして我々に正しいことはあ

るのだ、と。そしてどんなことどもをまあこの我々がお前に対してしようとすることもせよ、お前にとってもまたそれらを仕返すことが正しくあるとお前は思うのか。それとも、一方、して見ると、お前にとっては父親に向かつては平等からしては正しいものもそもそなかったのだしまた主人に向かつてそうであり、それはもしお前にそれがあるならばということだが、だからまたお前がその目に遭ったそのことを仕返すこともまたそうだった。悪しく言われて言い返すことも叩かれて叩き返すこともその他そうした多くのことがそうだったのである。然るに、祖国に向かつてでは、して見ると、諸々の法ではあつてもそれらをさえお前には許されてあつて、そこでまたお前をこの我々が滅ぼすことを手がけるならば、正しいと考えながら

にはあるが、するとまたお前も、他方、我々諸々の法と祖国を君の出来る限りにお前は仕返しに滅ぼそうということなのか。そしてお前は主張するといふのであるか、それらのことを遣つていても正しく行為しているのだ、と。真実もって徳を心掛けていながらだよ。それともそのようにもお前は賢くて、そこでまたお前には今に気づかれてはいないといふのか。母よりも父よりもその他の祖先のすべてよりもより尊いもので祖国はあり、またより厳かなものでありより聖なるものでありそしてより大きな分け前においてある、神々の許でも人間たちの知性を持った者たちの許でもということが。そして人は、畏敬せねばならず一層讓歩しまた機嫌を取らねばならないのだ、怒っている祖国に対しては父親に対してよりも一層にである。そして或いは説得するか或いは何でもあれその命ずるところをなさねばならぬのである。そしてその身に受けねばならないのだ、もし何かをその身に受けるべく祖国が課すのなら、黙つてだ。それが打たれることであれ縛りつけられることであれ、戦争へと祖国が連れて行きお前が傷つこうとしても死のうとしてもそれらをしなければならぬのだ、そして正しいことはその通りにあるのだ、そして退いてはならずまた引き下がってもならず戦列を放棄してもならないのである。否、戦争においても法廷にお

C いてもまた一切の場所でしななければならないのである、何でもあれ、ポリスと祖国が命ずることは。或いは祖国を説得しなければならぬのだ、その筋道で正しきものがそもそもあるその筋道で。然るに、暴力を振るうことは神の意に適うことではない、母に対しても父に対しても、ということだが、だが大いにこの方々よりまよひもなく祖国に対してはそうなのだ」と、こういうことをである。何を我々は主張するべきであろうか、クリトーン、真実なことどもを語ってはいはしなしか諸々の法は。それとも否か。

クリトーン

この僕には語っているとされる。

十三

ソークラテース

「それなら、見てくれ給え。ソークラテース」と、多分、諸々の法は言うことであろう「この我々がそれらのことどもを真実なこととして語っているかどうかを。正しからざることどもをこそ我々に対してお前は今お前が手がけていることをやろうと手がけているのだとこう。何故なら、この我々はお前を生み育て上げ教育し我々の出来るすべての美しきことどもをお前に D してその他のすべての市民たちに分け与えたその上で、それにも拘らずアテナイ人の中の望む者には自由をちゃんともう設けていることを公にしているのだから。すなわち、成人に達したとされポリスの中にある物事と我々諸々の法を見た時には、誰でもあれその人に我々が気に入らないといったその人は自由があるのだ、自ら持ち物を携えた上で立ち去るべき自由が。何

処へなりとその望むところへと、とね、そして我々諸々の法の中のどれ一つも妨げもせず、禁止することもしてはいないのだ。もしまたお前たちの中の誰かが植民地へと行くことを望んでも、それはこの我々とポリスが気に入らぬのだ。ただが、またもし居を移し何処か他のところへ行くとしても何処へとあれその望むそこへ行くことを望んでもである、自分のものを持ってだね。然るに、お前たちの誰でもあれ、留まる者は、それはどんな仕方でも我々が諸々の判決を判決しまたその他のことどもに關しても調べていることかを見ながらにであるが、今や我々は主張するのだ、この者は事実において我々に同意をしまつてゐるのだ、何をであれ、この我々が命ずることはそれらをするだろうことを、と。そして従うことをせぬといったような者は、我々は主張するのだ、三重の仕方でも不正を犯しているのだ、と。すなわち、また生み手であるところの我々に服していないということがそうだし、また育て手であるものにもそうだということが然り、そして我々に対して服従するだろうと同意したその上で服従もせず我々を説得もしないということがそうである。それはもし立派な仕方ではないような仕方でも何かを我々がしているとするばということだが。そしてその際、我々は提示して行つたのだ。しかし、乱暴な仕方でも課したのではなかった、何でもあれ我々の命ずることをなすべきことを。否、ここでは我々は欲したのだ。二つのうちのどちらかを。すなわち、或いは我々を説得することか、或いは為すことかを。ではあつたが、それらのどちらもしてはいないのだから。

十四

これらの、と我々は主張するのだ、お前もまた、ソークラテース、責めを受けることであらう、もしもお前がその目論んでいることをなそうものなら。そして最小ならずアテナイ人たちの中ではお前を、否、取り分けてのことに。されば、この僕

がもしこう言うとする、「一体、何故にです」と。多分、僕のことを彼らは正当にも叱ることであろう、取り分けてのことにアテナイ人たちの中ではこの僕こそ彼らに対してはその同意を同意しているのだぞということを語りながら。何故なら、彼らは主張するだろうから。曰く――

「ソークラテース、大きいのが我々にはこれらのことの証拠としてあるのだ、お前には、この我々もポリスもその気に入っているのだという。何故なら、いつかなお前は他のアテナイ人たちすべてとは異なったその仕方でもポリスに留まっておったことなどなかったからだ、もしお前に抜き出されてそれが気に入っておったのではなかったら。そして祭礼見物へとかつてポリスの外へ出たこともなかった、一度イストモスへとという場合を除いて。またその他どんな場所へともだ。もし何処かへ出征しようということではなければね。また他の外国行きもお前はすることがなかった、ちょうど他の人々がするといった。更にはまた欲望がお前を、他のポリスに対しての他の諸々の法に対してのということでもそれを知るべく捕えることもなかった。否、この我々がお前には十分であり、また我々のポリスがそうだった。そのように強く我々を選び取りまたお前は我々に従ってポリスの人たらんことに同意しておったのだ。他のことどもあれ、子供たちをお前はこのポリスで作ったのだ。それはお前にはポリスが気に入っていたからというように。なお、それでだよ、まさにこの裁判において許されてあったのだ。お前には国外追放の罪科を申し出ることが、もしお前がそう望むのなら。そしてまさにそのことをポリスが不本意だということにお前が手がけていることは、その時には本意なのだとしてお前は遣れたことだった。然るに、まさにお前はその時には、一方、体裁を繕ったのだ。四の五の言いはせぬ、例えお前が死なねばならぬとしても。否、お前は選んだのだ。お前の主張するところでは、国外追放の前に死刑を。然るに、この今、彼の諸々の言論をお前は恥じることもせず、我々諸々の法に一

目置くこともせず、破壊しようと手がけながら、お前は遣っているのだ、まさにそれこそは最低の奴隷が遣ろうかということ。すなわち、逃亡することを企てながらにである、諸々の約束と同意、それら従ってこそ我々に対して市民たるべくも振舞うことをお前が同意しておたものに反してだ。されば、第一には、一方、我々に対してまさにこのことを君は答えてくれ。我々が真実なことどもを語っているかどうかだ。主張して君は早同意しているのだ、我々に従って市民たるべく振舞うことを事実においては、いやしかし、言論においてはではないかと言いつつもだ。それとも真実ならぬことを我々は語っているだろうか。我々は同意することにしようか。

クリトーン

それが必然だ、ソークラテース。

E
ソークラテース

「されば、こうじゃないか」と、彼らは言うことだろう「我々自身に向かつての約束と同意とをお前は踏み越えて行くこととしているのだ、と。その際、お前は強制の下で同意したわけでもなく騙されてというのでもなく僅かの時間のうちで考慮することを強いられてでもなかった。否、七十年のうちでだった。その中では許されてお前にはあったのだった、立ち去ることが。もし我々が気に入らず更には正しいものとしてお前にそれら同意が現れぬとすればだよ。然るに、他ならぬ君はラケダイモーンもクレレーターも、代りに選ぶことはしなかったのだ。それらのポリスを度ある毎によく治められていると言っているのではあったが。またその他の如何なるギリシアの国家、外国の国家の何一つをもだ、否、より少なくともそれから外遊することをしなかったのだ、びっこの人たちや盲目の人たち、また不具の人たちよりもっとだった。そのようにお前には抜きん出て

他のアテーナイの人々よりはポリスと我々諸々の法律とが気に入っておったのだ、明らかにね。何故なら、一体、誰にとってポリスは諸々の法を伴わずに気に入るのか。然るに、この今にだ、お前は踏み留まらぬというのか、諸々の同意を与えてしまわれたことどもに。もしとにかく我々にお前が服するのであればだよ、ソークラテース。とにかく笑いものなどにはきっとお前はなることなどあるまい、ポリスから出て行ったりしながらに。

十五

- 何故なら、考えてみてくれていることなのだから、これらのことでお前が一線を踏み超えてそれらの中の何かのことで過ちを犯しながらでは、如何なる善をお前はお前自身に対してもお前自身の知人に対しても成就することになるのかをだ。何故なら、先ずはとまれ恐らくはお前の知人たちが自らもまた逃亡生活ということになりポリスを奪われる、或いはその財産を失うだろうとは、殆ど何か明らかなことだから。他方、自らが第一に先ずは最も近い諸々ポリスの何のどれかへと行くとするならば、或いはテーバイへ或いはメガラへとだが——何故なら、よく治められているのであるから、両方とも——お前は敵として行くことになるだろう、ソークラテース、それらのポリスの国制にとっての。そして自らのポリスのことを心配する限りの人々はきっとお前を疑念の眼で見ることであろう、破壊者なのだ諸々の法のと考えながら。そしてお前は裁判官たちに対してその判決を確かなものにする事となり、そこで彼らは正当な仕方て裁きを裁いたと思われるのだ。何故なら、諸々の法の破壊者は誰であれ何処か強く思われることだろうから、とにかく若い人々とか考へのない人々の破壊者なのだ、と。されば、君は避けらるであろうか、よく治められたポリスと人々の中でも最も秩序のある人たちを。それともお前はその人たちに近づいて行って

D は恥ずかしげもなしに言葉を交わすのだろうか——如何なる言論をなのだ、ソークラテース。それともそれはまさにそれらをここに議論しておったそれなのか。徳と正義は最大の価値あるものとして人間たちにとってはあるのであり、また諸々の

法的なことどもと諸々の法とが然りとかいっただような。そしてお前は思わないのかね、無様なものにきつと現れることであるソークラテースのその所業がとは。とにかく思うべきなのだ。いやしかし、一方、これらの場所からお前は立ち去り、他方、テッタリアーは客人のクリトーンのである人たちの許へと行くことだろうか。何故なら、そこには実に、最大の混乱と放埒とがあり、そして、多分、喜んで聞いてくれることだろうか。何とも噴飯ものといった具合にお前は脱走したのであったか、

E 或る変装を身に纏つては。或いは皮の衣服とかその他の脱走者連中が身に着けるのが慣わしのものを手に入れてだ。そして君自身の格好を変えて。然るに、老人たる男が人生には僅かの時間が、当然のことであるが、残されてあるだけなのに、お前は敢えて遣つたよ、そんなにも執念深く生きることを欲することを。諸々の法も最大のそれらを蹂躪した上でと、こう言おうとする者が誰一人としていないであろうか。多分、もし人をお前が苦しませるようなことがなければ。だがそうでなければ、君は人のあげつらうのを聞くだろうよ、ソークラテース、沢山の君自身に不当なことどもを。そこで実はお前は阿おぼながらにきつと生きることだろう、すべての人々に対して。そして奴隷としてか傅かきながら——一体、何をしながらなのか。それともテッタリアーで馳走になりながらなのか。それはちょうど食事へとテッタリアーへは外遊して来たところだというように。然るに、言論の彼のもの、正義とその他の徳とについてのそれらは、一体、何処に我々にとってはあることだろうか。

E いやしかしである、子供たちのためにお前は生きることを望むのであるか。彼らを育て上げ教育するために。だが、どうなのだ。テッタリアーへと彼らを連れて行った上で、お前は養育し教育するだろうというのかね。外国人にしたその上で。ま

たそのことも彼らが享受せんがために。それとも、そのことは、一方、否、他方、お前自身が生きてあればより優れて彼らは養育され教育されるだろう、よし君が彼らとともにいることがなくともと、こうなのかね。何故なら、知人たちのお前にとつてある方々が、きつと彼らの世話をすることだろうから。どちらなのだね、もし、一方、テッターリアーへとお前が旅立つとしたら彼らは世話をするだろうが、他方、ハーデースへと旅立つとすれば、彼らは世話をしてくれることがないのだろうか。いやしくも、とまれ、何か増しなところが彼ら、君にとつての知人なのだと称している彼らのものとしてあるとすれば、とにかくそう思うべきなのだ。

十六

いやしかし、ソークラテース、お前は我々お前にとつての養育者たる者に従つて子供たちもより価値あるものともしてはならぬし、生きることもその他の何一つもそうしてはならないのだ、正しきものよりも前には。ハーデースへ行つた上でお前がすべてそれらのことどもを彼の地の支配者たちに弁明することが出来るためである。何故なら、此処でもまたお前にとつてそれらのことを遣つて行つてではより善いこととは見えぬし、そしてより正しいこともより神意に適うこともそうであるし、さらには君に関はるその他の誰一人にとつてもそうであり、彼処へ君が至つてもより善いこととはないだろうから。いやしかし、この今に、一方、不正を受けてしまいお前は立ち去るのである、もし立ち去るのでしたら。我々諸々の法によつてではなくて人間どもによつて。他方、もしお前が出て行くとするならば、すなわち、そのように醜い仕方では不正の仕返しをしかつまた仕返しの悪を働いたその上であるが、それもお前自身の諸々の同意と我々に向かつての約束とを蹂躪し諸々の悪

事を仕出かしてであり、これら最も少なくでしか悪事をしてはならなかった人々に対して、お前自身と友たちと祖国と我々に対してだとすれば、この我々がお前に対してはその生きている時に辛くあたることだろうし、また彼処では我々の兄弟たるものハーデースにおける諸々の法が恵みある仕方ではお前を受け取ることはいきつとないことだろう、知っているのだからね、我々をもお前が減ぼすことを手がけたということ、お前のその了見で。いや、お前を説得してはならぬのだ、クリトーンが。彼が語ることをするようにと。この我々が説得するよりも一層にね。

これらのことを、親しき友クリトーンよ、よく知って貰いたい、この僕は思われるのだよ、聞くように。ちょうどコリュバンテスの儀式を祝う人々が諸々の笛の音から聞くと思われるそのようにね。そしてこの僕の中ではそれらの言論のその音がぶんぶんときり他のことどもから聞くことを不可能にするのだよ。いや、知って欲しい、とまれこの今にこの僕に思われることどもの限りでは、もし君がそれらと反対に論ずるとしても無駄に君は語ることだろうよ。然は然りながら、もし君が何かより多くをなすだろうと思ふのなら、語り給え。

クリトーン

いや、ソークラテース、僕は語ることが出来るといった具合ではないよ。

ソークラテース

E それなら放ってくれ給え。クリトーン、そして我々はこのまま遣り方で遣って行くこととしようではないか。その遣り方で神が導きに立って下さっているのであれば。

(平成二十年四月二十四日午前五時開始、同三十日午後七時三十分訳了)